



発行 北海道学校図書館協会
 会長 大久保雅人
 事務局 札幌市立しらかば台小学校
 事務局長 野村 邦重
 TEL (011)852-4090
<http://www.hokkaido-sla.jp/>
 印刷所 ㈱北海プリント
 TEL (011)811-2396

平成22年度 青少年読書感想文全道コンクール 入賞者決定!!

今年も全道から、たくさんの素晴らしい作品が集まりました。第1次、第2次審査を経て、入賞者が決定しました。12月5日(日)に晴れの表彰式が行われます。入賞者の皆さん、おめでとうございます。

第56回 青少年読書感想文全道コンクール 第36回 北海道指定図書読書感想文コンクール

特別賞入賞者一覧

北海道知事賞	*「十歳のきみへ」を読んで * 真実を見つめて * 「生と死の境界線上で」	留萌市潮静小 4年 市川 夏鈴 旭川市北都中 1年 佐藤 彩 旭川東高 2年 中田 絵梨
北海道議会議長賞	* 心の中のひょう本 * 「ねこはしる」を読んで * 私の中の「自分」が生まれる～『ジロジロ見ないで』をきっかけに～	室蘭市知利別小 2年 小林 拓暉 旭川市神居小 3年 片山 葉月
北海道教育委員会教育長賞	* 「明日につづくリズム」を読んで * 風をつかまえてー私の風をー * 「ミリーのすてきなぼうし」を読んで * 「やんちゃ子グマがやってきた!」 * 虹色ほたるが照らしたもの * 悠久なるもの	教育大附属釧路小 6年 高原 楓奈 登別市西陵中 3年 秋葉 美樹 札幌旭丘高 2年 伊澤 咲弥
北海道学校図書館協会会長賞	* 「ひなのころ」を読んで * 「どんなかんじかなあ」をよんで ・ 「僕らの幸せに感謝しよう」 ・ 命の栄養分は愛情 ・ いのちの約束 ・ ひめゆりの乙女達に捧ぐ	函館市白尻小 1年 大清水 拓斗 室蘭市海陽小 4年 日達 智哉 室蘭市地球岬小 6年 後藤 茉梨 室蘭市鶴ヶ崎中 1年 齋藤 有里
毎日新聞社賞	* とっておきの詩を読んで ・ ありがとう! リナとフェローザ * 「つながっていく命」～『海は生きている』～を読んで ・ 奇跡のプレイボールを読んで ・ 「食べる」ことの重さ ・ 「ずーっとずっとだいたいすきだよ」をよんで ・ 『襲撃』を読んで ・ 「正しさ」を問う ・ 盲導犬モア ・ エイティアンとの出会い	帯広南商業高 3年 二瓶 望 留萌市潮静小 1年 渡辺 愛結 旭川市知新小 4年 村山 健 森町森小 6年 佐藤 爽花 北嶺中 3年 小玉 爽太 旭川東高 2年 樋 えみり 苫小牧市美園小 2年 長谷川 匠 札幌市真駒内南小 4年 松川 沙世
北海道読書推進運動協議会長賞	* 「ムーミンのふしぎ」をよんで ・ わたしのせかい ・ 夢をかなえる ・ 五体不満足を読んで ・ アンとの出会いで気づいたこと ・ 「明日につづくリズム」を読んで ・ 「イルカを食べちゃダメですか?」を考える ・ 「点子ちゃん」を読んで ・ この本が私に教えてくれたこと ・ 「ちいさなまちをよんで」 ・ 命の重さについて考えた夏 ・ 点子ちゃんの世界 ・ イレーナセンドラー-ホロコーストの子ども達の母を読んで	室蘭市陣屋小 5年 富田 理大 室蘭市東中 3年 川村 成美 岩見沢東高 3年 鈴木 天理 小樽市緑小 1年 杉山 聖奈 札幌市新琴似中 3年 三井 薫 旭川西高 3年 西田 将喜 森町鷺ノ木小 6年 阿部 萌花 滝川市開西中 2年 吉原 真梨 岩見沢市中央小 6年 佐々木 萌利 岩見沢東高 3年 伊勢 菜々美 函館市深堀小 1年 漆畑 元基 教育大附属函館小 3年 大山 芽依 森町鷺ノ木小 6年 菊地 樹里 遺愛女子中 1年 佐藤 梨夏
北海道青少年育成協会会長賞	・ 増毛町の思い出 ・ 「いっしょにごはんたべよ」を読んで	函館市青柳小 6年 宮崎 理紗 増毛町増毛小 2年 宇治 彪来
北海道PTA連合会長賞 北海道高等学校PTA連合会長賞 北海道教育振興会長賞	・ 増毛町の思い出 ・ 「いっしょにごはんたべよ」を読んで	函館市青柳小 6年 宮崎 理紗 増毛町増毛小 2年 宇治 彪来
北海道教育文化協会賞	・ 増毛町の思い出 ・ 「いっしょにごはんたべよ」を読んで	函館市青柳小 6年 宮崎 理紗 増毛町増毛小 2年 宇治 彪来
はるにれ賞 教育出版社賞 文研出版社賞 北海道図書教材協会賞 図書館ネットワーク賞 北海教育評論社賞	・ 増毛町の思い出 ・ 「いっしょにごはんたべよ」を読んで	函館市青柳小 6年 宮崎 理紗 増毛町増毛小 2年 宇治 彪来
光陽校賞	・ 増毛町の思い出 ・ 「いっしょにごはんたべよ」を読んで	函館市青柳小 6年 宮崎 理紗 増毛町増毛小 2年 宇治 彪来
学 校 賞	・ 増毛町の思い出 ・ 「いっしょにごはんたべよ」を読んで	函館市青柳小 6年 宮崎 理紗 増毛町増毛小 2年 宇治 彪来

* 印は、全国コンクール応募作品です。

北海道知事賞

「十歳のきみへ」を読んで

留萌市立潮静小学校 4年 市川夏鈴

「お誕生日おめでとう。」

この夏、十歳の誕生日をむかえた私に、母はこの本をプレゼントしてくれた。タイトルは「十歳のきみへ」だ。これは、医者でもある作者の先生が、十歳の私達に向けて、大切な事について語っている本だ。私は、これからの生き方のヒントになる言葉がたくさんつまっているように思えて、夢中で読んだ。

初めに心が動いたのは、「他の人のために使えた時間が一番生きてくる。」という言葉だ。毎日、時間におわれ、自分の事をこなすだけで精いっぱいなのは、他の人のために時間を使うなんて考えられない、と少しとまどった。しかし、読み進めていくうちに、自分のため以外に時間を使えた時の最大の喜びを、毎日の生活の中に見付ける事が出来たのだ。ブラスバンド少年団での日々の活動の充実感や、コンクールで味わったすばらしい感動も、自分の時間をみんなの時間に変えて頑張ったからこそ、時間に命がふきこまれ、意味のあるものになったのだと思った。他の人と共有した時間は、一人の時間では味わえない特別な喜びで心をいっぱい満たしてくれる。私はこれからも、家族のために手伝いの時間をふやしたり、友達にやさしくする時間を作ったりして、私にできる他の人のための時間の使い方をもっと見付けていこうと思った。

それから、「毎日の中に将来に生かせるレッスンがかくれている。」という言葉からも何かを感じた。今、私がなかなか思い通りいかずになやんでいる事や、しかられてばかりでつらいなと思う事など

は、大人になるための大切な練習の一つなんだと教えてもらった。今の私の苦しみは、一つもむだな事ではなく、必ず将来の私の役に立つんだと思った。そう思ったら、今の自分に負けるものか！と、新たなやる気と勇気がぐんぐんわいてきた。

「ゆるすことのできる人になって下さい。」

先生が私達に託そうとしている事だ。大人達がやられたらやり返すというくり返しをやめなかったために、今も続いている戦争。しかし、おたがいが相手の傷に気付き、相手をゆるす勇気をもてば、和解への第一歩になるという。私も時々、「やられてばかりではいやだ！こっちもやってやろう！」と思う事があり、そのたびに、どんどんいやな自分になっていき、落ちこむ。子供のけんかも大人の戦争も同じだ。やり返しからは何も生まれない。私も先生と同じように思った。世界中にいる十歳のみんなが、ゆるす気持ちをもち続けていけば、きっとそれが世界平和の実現につながっていけるのではないか。私もゆるす事から始めよう。相手の注意や意見をしっかり受け止め、腹が立っても、とがった言葉を出す前に、一息おいてみよう。ゆるす事のできるやわらかい心をもって、これからは一生懸命生きよう。それが、十歳の私にたくさんの言葉をくれた先生へとどきたい私の返事でもある。この本を贈ってくれた母にも感謝したい。行け！十歳の私！

(日野原重明 著

『十歳のきみへー九十五歳のわたしから』)

北海道知事賞

真実をみつめて

旭川市立北都中学校 1年 佐藤 彩

大きくて鋭いくちばし。遠くを見据える光る瞳。ワシだ。私は人生で初めて、表紙の印象で読む本を決めた。羽の流れや翼の形、全てに威圧感・惹かれる要素があったからだ。

齊藤さんの獣医師としての仕事は、普通と大きく異なる。最も大きな違いは、野生動物で絶滅の危機に瀕したオオワシやシマフクロウなどの猛禽類の治療をする事である。普段は滅多に目にしない野生動物達。しかしこの本の動物達は、私達に自然の素晴らしさや野生動物の儚さまで問いてくる気がしてならない。そして「野生に帰すのは無理だと判断してしまえば、それで終わってしまう。野のものは、野へ帰してやりたい」。ページをめくり読み進めていくにつれて、野生動物の真の姿と現状、そして齊藤さんの考えが本から伝わってきた。誰かの何かのために努力する事は、人である上の一歩の誇りなのであった。

齊藤さんが治療するのは、傷ついた野生動物達。私は以前、似た様な光景を目にした事がある。おそらく誤って巣から落ちたのであろう、今にも命の灯が消えそうな、スズメのヒナだ。そのヒナにはほとんど羽は生えていなく、目もまだ開いていない。しかし、いつ消えるか分からない命の灯を必死につなぎ止め、生きていた。野生動物の強さを実感した。その時私は、そこに立ち尽くし、感動するしかなかった。生きる素晴らしさを、我が身をもって体感した。それが私の「野生動物」との出会いだった。

しかし齊藤さんにとっての「野生動物」は、私と少し違う。何しろ相手は地球上に数えるほどしか存在しない貴重な種なのだ。一羽たりとも命を、生きていることを無駄にしてはならないのである。「脚には真新しい切り傷やすり傷」「全身に打撲」「大きなケガ」様々なイメージが私の脳裏を巡り、恐怖を与えてくる。そこで冷静でいられた齊藤さんの精神が、私には不思議だった。状況を想像しても、しきることが出来ない。その精神的な強さはおそらく、自然への愛から成り立つものなのだろう。貴重な猛禽類を愛する齊藤さんだからこそ、感情を大切にしながらも守り抜くことができたのだ。

私は将来、獣医師になりたいと思っている。その理由は、本に出会うまでは、「動物が大好きだから。」「多くの命を救うことで人々の動物に対する心が少しでも良い方向へ向かってほしいから。」などであった。しかしこの本により、私の心の中が片っ端から動かされたのだ。私の医師を志す決意は甘く、まだまだ未熟なものだと思い知らされた。獣医師は、軽い気持ちでなってはならない

い、自然の中の動物たちを愛せる心がなくてはならないと、この本が訴えてくるようであった。私は自問自答を繰り返す。「何のために獣医師になるのか。」「獣医師になることで何をするのか。」たどり着いた答えは、やはり動物に対する愛である。傷ついた動物達を心身共に治療し、それぞれの元の生活に戻してあげたい。

齊藤さんは、スポークスマンと呼ばれる、動物の苦しみを人々に伝える仕事もしている。「自然のめぐり合わせで絶滅の危機をむかえたわけではなく、人間がその原因に手をくだしているのです。」と言いながら、一人一人に合った言葉を探し続けていた。重要なのは、敵味方の立場ではなく、伝えたい人に伝わるかたちで話すこと。コミュニケーションをとり続けること。相手の気持ちになって考えることは、私の普段の生活の中で欠けている点であると思う。相手の事は考えず、自分の意見は正しいと思い込んでしまう性分である。齊藤さんが 鉛中毒についてハンターと話をし解決した時のことを考えると、自分に恥じる部分が多く、悲しい気持ちにもなる。齊藤さんは、話すことで問題解決に至った時にこう言った。「きっぱりと敵味方に分かれて話もしなかったら、こんな糸口を見つけることはできなかったでしょう。」と。

地球上に生息する数が少ない生物は見守り、数が多い生物は見捨てても構わないという事が、果たしてあって良いのだろうか。絶滅危惧種に指定されていたり、それに近い生息数の生物を守ることは当然である。しかしその事ばかりを繰り返し、考えているだけで良いのだろうか。私は、間違いであると思う。「言うは易し、行ふは難し」だ。齊藤さんは、その「行ふ」所まで実行しているのである。

諦めずに実行していると、いつかそれが実となる。しかしそれには、努力という名の苦労が必要なのである。努力を怠る人間に、高い理想を語る資格はあるのか。努力をした事は、決して無駄になることはない。——齊藤さんが、そして本が教えてくれた。私がいつか獣医師になったら、その時こそ齊藤さんの元を訪れ、お話を伺ってみたいと思う。この本は、私の夢の大きな第一歩となった。そしてこの地球の理想と現実を深く代弁してくれたのだ。齊藤さんは言う。

「野のものは野へ帰してやりたい」と……。

(齊藤慶輔 著

『世の中への扉 野生動物のお医者さん』)

北海道知事賞

「生と死の境界線上で」

北海道旭川東高等学校 2年 中田 絵梨

人には死への恐怖がある。それと同時に、生への苦しみがある。前者の思いがより強いゆえ、人は耐え、生きていけるのだろう。では、二つの間の不等号が向きを変える時、そこに働く力の元となるものは何なのだろうか。

「一時の苦しみに永遠の自由を」

これは実在した中国のある少女が、最期に書き残した言葉である。一人の少女が自ら命を絶つことを望んだとき、彼女に何があったのか、私は無性に知りたくなった。そこに答えがあるような気がしたのだ。そんな思いが私を取り巻き、何かに突き動かされるようにして、彼女の日記をむさぼり読んだ。

少女の名前はニン・ク。上海一の名門中学に通っていた。国家を担うこととなる、いわゆるエリートだった。彼女はある日、自らの腕をカミソリで十四ヵ所も切りつけた。それでも死にきれず、一日おいた次の日に飛び降り自殺をした。まだ十五歳だった。

人の心はとても繊細だ。思いがけず、ひどく傷ついたり、逆に傷つけてしまうこともよくある。それを恐れるあまり、感情を押し殺し、「私は何も感じていない」と自らに言い聞かせ、偽の感情を作り上げる。それでもやはり、心は傷ついていて、息苦しさや無気力とも違う、自分ではどうしても整理のつかない気持ちに直面する。このような経験は、誰にでもあるのではないだろうか。けれども、彼女のように、自らの命を絶つという行為に至るほど深い傷を、私は負ったことがない。私の感覚からすれば、彼女の行動は「絶望の淵」や「狂気の沙汰」の末に辿り着く所のように思える。とはいえ、それは実感を伴わない。あくまでも、想像の範囲でしかない。それゆえ、私とニン・クが心を共有するなどということは不可能だ、と思っていた。

しかし私の考えはすぐに覆された。彼女は異常なのではなく、むしろ異常に見えるほど正常だったのではないだろうか。彼女は自分というものが、大人達によって直線的に切り揃えられていくことに気づいてしまったのだ。同じような演習問題を繰り返す機械的な毎日、エリート校の生徒という固定化された周りからの視線、母親や先生達からの重すぎる期待。日々の全ては大人達や社会によって制御されている。このようにして潰されていく残酷で無表情な毎日に、何の意味があるのか、と。

私がニン・クと同じ十五歳だった頃のことを、思い起こした。自分が無力だと薄々わかっていながらも、大人達の支えから離れ、自力で進みたいと願っていた。しかし、たいていの場合つまづき、現実を知り、落ち込む。それでもなお、次こそはと思い、もう一度挑戦する。こ

の繰り返しを通して、少しずつ成長してきたように感じている。ならば、この葛藤はありふれたことではないだろうか。死を選んだ彼女と、生を選んでいる私との違いは、何だったのか。それは周囲の手を圧力と受け取るか、愛情と受け取るかということだけだったのかもしれない。

彼女は十五年間、不幸な家庭環境と学校生活の中で、何を信じるべきかわからなくなり、悶え苦しんでいた。ようやく見つけた恋という希望の光さえも、保守的な大人達によって、断ち切られてしまった。彼女は遺書の中で、「魂だけは私が作り上げました。」「今、命が魂を束縛していることに気がつきました。」と語った。私は、はっとした。私が感情に目をつぶる本当の理由は、まさにこれだったのだ。魂がどんなに激しく抗っていても、社会の中でうまく生きていくために、命が魂を抑えつけているのだ。彼女はその矛盾に憤り、死んで自由になりたいと願った。私達は、本当の自分を求める無意識の世界の中で、死への希望と生への未練の境界線上を、絶妙なバランスで渡ってきたのかもしれない。周囲の無理解、不条理な束縛、優越感の餌食を求める卑しい心……。人間が生きていく上では様々な障害が立ちはだかる。こういったものが、彼女の不等号を逆転させたのではないだろうか。

人は独りではあまりにも卑小だ。想像を超える壁に突き当たることもある。己の非力を感じたなら、素直に心を開き、救いの手を求めたとしても、決して敗北にはあたらぬ。ニン・クも漸く頑なな心を開き、手を伸ばそうとした矢先だった。しかし、鈍感な大人達は、彼女の手を振り払ってしまったのだ。

同世代の自殺の報道を耳にする度、彼らの中にもニン・クと同じような人はいなかったのだろうか、周りの人はどうして手を差し伸べてあげなかったのか、と考えてしまう。が、他人事のように非難する一方で、私にはできたのか、と揺れ動く自分の心もある。

私達は、魂よりも命を、感情よりも協調を尊重する、狡猾な生き物だ。その上、互いに己の領域に立ち入られることを嫌う風潮にある。しかし、私達が背負うべき未来に向け今こそ、自分の魂を時々そっと自由にしておける術と、相手の魂に手を差し伸べてあげる勇気を模索する時なのではないだろうか。

(陳丹燕 作 中由美子 訳)
『ある15歳の死 女中学生之死』

北海道議会議長賞

心の中のひょう本

室蘭市立知利別小学校 1年 小林 拓 暉

心の中にけっしてきえない《うみのいろ》のびんがぼくも初山別キャンプ場に行っていました。日本海の色は、水平線にむかってグレーに近い青、グリーンに近い青、水色、黒っぽい青と色がかわつていたり、光があたってキラキラ銀色になったりとてもきれいでした。本当は、ムーミンがならべた《ゆうやけのいろ》のびんも楽しみにしてたけれど、雲がでてきて雲のすき間から赤くなったり、オレンジに見えるくらいで、あまりあつめられなくてざんねんでした。

けれどだんだん暗くなって、ポツポツ星が見えるようになり、あつという間に空は星だらけになりました。夜は天文台に行って天体望遠鏡で見せてもらおうと、さそり座のアンタレスが赤くポツと光っていたり、こと座のベガがダイヤモンドのようにピカッと光っていました。土星はせつ明する人が「見たらすぐわかるよ。」と言ったのでのぞいてみると、輪がはっきりあって、「本ものですか。」と聞いてしまいました。ねる前には、天の川やながれ星も見えて、おりひめやひこぼしはこんなに近くに見えるのに、十六光年もはなれていると聞

いて、本当はひとばんで会えないことを知って、びっくりでした。

スナフキンは、「何でも自分のものにしない。そこにあるからきれいに見える。大切なものは頭の中になってしまう。そうすれば、なくなったり、こわれたりしないし、持ちすぎて重くなったり色がきえたりしない。」と言っていたけれど、思い出がそうだなと思いました。

ぼくは《星の光》を頭の中にあつめるのにせいでこうです。光の思い出は、イタンキのピオトープにほたるを見に行つたことがあります。そばで見ると小さな虫でした。きつとかごに入れて一人で見ると、まっ暗な道をかき中電とうを持ってせより高い草の中まで行つたから、ポツポツと光っているのを見て、すてきな気分になったと思います。これからもいっぱい思い出のひょう本を作りたいです。

(トーベ・ヤンソン 原作 松田素子 文
スタジオ・メルファン 絵

『ムーミンのふしぎ』)

総 評

自分らしい表現で、自分らしい感動を作品に

審査委員長 浦田日出雄 (札幌市立西岡小学校長)

全道各地区から厳しい審査を経て選び抜かれた634点の作品を25名の審査員が5つの部に分かれて各作品を丹念に読ませていただきました。

その多くの作品からは、自ら選んだ一冊の本と出会い、そしてその感動を新鮮でみずみずしい感性で表現し、自らの現在の生活を振り返り、自らの生き方と重ね合わせながら、真摯に向き合っている姿を感じとることができました。

「小学校低学年」では、子どもの目線で読み、自分を重ね、生活を振り返ったり、子どもらしい空想の世界を広げていったりした作品が印象に残りました。

「小学校中学年」では、本の世界をじっくりと読み味わい、読者である自分自身と比べてみたり、心の中で登場人物と対話したりすることで湧き上がってきた感動を表現している作品が多くありました。

「小学校高学年」では、登場人物の考え方や生き方などに対して抱いた感動や共鳴を的確に表現したものや作品を貫く主題を捉えて、自らの体験などとも重ね合わせながら組み立てた作品が多く見られました。

「中学校」では、構成に工夫を凝らした作品や新たな発見を通して自らの将来へ夢のある生き方を綴っている作品などがありました。

「高校・勤労青少年」では、読み手を意識した充実した作品が多くみられました。

以上は各部門 の特徴ですが、全体を通して今後に向けて工夫したほうが良い諸点についてお伝えしておきます。

- 著者の主張とそれとたいする自分の意見・感想をはっきり区別すること
- 冒頭の段落文章の工夫をすること
- 効果的な文章構成を考え、用いる言葉を吟味し、表現の仕方を練り上げ読み手に説得力を感じさせること
- 制限字数を使い切ること
- 誤字や誤記などに注意し、話し言葉と書き言葉の混同に気をつけること

限られた字数のなかで表現するので、何度も推敲することですが、自分らしく表現することも大きな要素です。何度も読み返すこと、清書をおろそかにしないことが大切です。来年、さらにすばらしい作品に出会えるよう期待します。

結びに、ご指導にあられた全道各地の先生や保護者の方々に心より敬意を表します。

北海道議会議長賞**私の中の「自分」が生まれる****～『ジロジロ見ないで』をきっかけに～**

北海道教育大学附属釧路小学校 6年 高原 楓 奈

私の顔の左半分と頸を、痣が覆っている。

痣を取るための全身麻酔によるレーザー手術をすれば、白い肌が覗くが、再発してまた手術。これまでに十六回の入院・手術を繰り返して来た。確かに、入院も手術も苦痛だが、私の心が一番痛むのは、手術後一週間、患部に当てがわれるガーゼだ。顔の半分を覆うガーゼは、私をミイラにしてしまう。人はすれ違い様に私を見る。「どうしたのだろう?」「事故?」「怪我?」「女の子なのに…」様々に視線は語る。同情や憐れみといった善意と受け取りたいが、その心の発端が異様な者を見た時の好奇心にあることを、突き刺さる視線が私に教える。私は張り裂けそうな心の中で叫ぶ。「お願い。ジロジロ見ないで。」と。

私の叫びそのままの『ジロジロ見ないで』という本。～“普通の顔”を喪った9人の物語～の副題と共に、「普通」とは言えない九人の顔写真が表紙に並ぶ。皆が皆、笑顔で。「勇気があるなあ。」が最初の思い。だがすぐに、別の思いが湧き起こった。「なぜ負い目のある顔を全国にさらしてまで、顔で顔を語ろうと決断したの?」この疑問が、私を本の世界に引き込む。夢中で頁をめくった。「私にはできそうにない。」との思いを持ちながら。

何枚もの写真と共に、九人それぞれの人生が綴られていた。海綿状血管腫・やけど・リンパ管腫・円形脱毛症……病名や原因は様々。しかし、手術や薬では普通の顔になれないことでは共通していた。顔が原因で幼い頃から陰湿なイジメにあったり、何社受けても就職が不採用になったり…言い尽くせない程の差別や偏見を皆経験している。「も

し私も手術ができなければ同じ思いを。」私には他人事に思えない。胸の芯がうずいた。ところが――。

ある人は、すれ違い様にジロジロ見る相手に、あえて笑顔でお辞儀する。慌てて視線を反らす人の多い中にも、笑顔を返す人もいる。その爽快感を大事にしているのだ。医者から無神経な言葉を浴びせられ、その悔しさをバネに後に看護学の教授にまでなる。「医療に携わる人は、患者の気持ちができる人でいて欲しい」との思いを胸に。この方の心の美しさ、辛さや悔しさの先にある「自分」を持っていることに、私は深い共感を覚えた。

そして私は確信した。九人は顔の苦難を精神的に乗り越えた「自分」を笑顔で伝えたかったのだ。大きな壁を乗り越えた人の強さと美しさ、自身に満ちた人生の確かな歩みを。

読み終えた私に父が言った。「人間万事塞翁が馬だよ。」そうだ。私は、この痣がある顔のお陰で、入院・手術・ガーゼを繰り返すうちに「患者の心の痛みまでも分かる医師になろう。」という目標が持てたんだ。私の中にも、強くて固い意思を持った「自分」が宿っている。外見を恐れることはない。次の手術は予定を遅らせ、夏休み明けにガーゼのミイラ顔で登校してやろう。人の視線に振り回されず、自分の中の人間性で人生を乗り越えてみせる。

(高橋聖人 撮影 茅島奈緒深 構成)

『普及版 ジロジロ見ないで』

～“普通の顔”を喪った9人の物語～)

優 秀 賞

小学校（低学年）の部（12名）

作 品 名	氏 名	学 校 名	学年
・ブライアン、ぼくもがんばるよ	三 田 隆 登	八雲町東野小学校	2年
・『シャーロットのおくりもの』	高 橋 知佳子	苫小牧市錦岡小学校	2年
・「おかげさま」を読んで	山 方 彩 裕	留萌市東光小学校	2年
・しょくぶつはたいせつ	渡 部 殊 生	室蘭市絵鞆小学校	1年
・むねとんとんをよんで	伊 藤 瞳	室蘭市絵鞆小学校	1年
・「いじわるなないしょオバケ」をよんで	田 村 友梨奈	北斗市茂辺地小学校	1年
・ないしょオバケとぼく	菊 地 颯	八雲町東野小学校	2年
・みんなのすてきなぼうし	吉 田 菜 緒	浦河町野深小学校	1年
・「ぼく、まだねむくないよ」を読んで	日 達 裕 紀	室蘭市海陽小学校	2年
・「ふしぎなこといっぱい!!」	高 橋 直 希	滝川市東小学校	2年
・「ムーミンのふしぎ」を読んで	西 崎 颯一朗	函館市北美原小学校	2年
・こころやあたまのなかに	本 間 百 詠	函館市北美原小学校	1年

小学校（中学年）の部（12名）

作 品 名	氏 名	学 校 名	学年
・せんそうのない世かいへ	野々村 奏 風	留萌市留萌小学校	3年
・「犬と私の十の約束」を読んで	塩 尻 彩 月	苫小牧市拓勇小学校	4年
・生きることの大切さ	高 野 怜 菜	旭川市北光小学校	3年
・「うそつきにかんばい」を読んで	野 尻 朱 乃	苫小牧市清水小学校	4年
・『点子ちゃん』を読んで	秋 葉 紗 世	留萌市沖見小学校	4年
・「ともだちのしるしだよ」を読んで	小 川 尊	岩見沢市日の出小学校	3年
・『点子ちゃん』を読んで	清 水 凜 花	苫小牧市清水小学校	4年
・「やんちゃ子グマがやってきた」を読んで	渡 部 真 緒	八雲町東野小学校	3年
・イオマンテを読んで	谷 本 基	岩見沢市岩見沢小学校	4年
・「イオマンテ」を読んで	伊 藤 央 訓	帯広市西小学校	4年
・命と愛	館 山 紋 奈	函館市南本通小学校	4年
・『いのちかがやけ！タイガとココア』を読んで	片 岡 真 穂	室蘭市大沢小学校	3年

小学校（高学年）の部（12名）

作 品 名	氏 名	学 校 名	学年
・生きる勇気をありがとう	村 田 彩 音	室蘭市旭ヶ丘小学校	5年
・「花さき山」を読んで考えた、私の花。	山 方 未 裕	留萌市東光小学校	5年
・平和への思いを引き継いで	伊 田 晃 都	札幌市藤野小学校	6年
・平和を願う	山 口 詩 織	森町鷺ノ木小学校	6年
・「リキシャガール」ナイマの勇気に学んだこと	ジミー・スティーン	森町駒ヶ岳小学校	5年
・「家族のきずな」	山 田 理 絵	小樽市緑小学校	5年
・「建具職人の千太郎」を読んで	船 越 緋 熙	教育大附属函館小学校	6年
・「海は生きている」を読んで	齊 藤 春 妃	留萌市留萌小学校	5年
・「がんばれ、シマリス」	佐々木 祥 汰	函館市駒場小学校	5年
・国際生物多様年	吉 田 隼 人	森町鷺ノ木小学校	6年
・縄文時代が教えてくれたこと	中 島 結	七飯町大中山小学校	5年
・「シマリス」を読んで	松 山 可 奈	教育大附属旭川小学校	6年

優 秀 賞

中学校の部 (15名)

作 品 名	氏 名	学 校 名	学年
・あきらめたら、あかん!	片 岡 美 菜	旭川市東光中学校	3年
・アンネの日記	銅 口 真 実	旭川市東光中学校	3年
・「美丘」を読んで	下 村 滯 水	留萌市港南中学校	2年
・「西の魔女が死んだ」を読んで	久保田 奈穂実	小樽市潮見台中学校	2年
・君死にたまうことなかれ	川 村 珠莉亜	教育大附属函館中学校	3年
・大切な事、ひとりぼっちの在り方	岡 山 聖	藤女子中学校	3年
・「変身」とは	大 木 菜 緒	札幌市上野幌中学校	3年
・負けない心	長 田 晋 一	滝川市明苑中学校	2年
・「命どう宝」	佐々木 律 佳	岩見沢市光陵中学校	3年
・つばさものがたりを読んで	鈴 木 琴 美	室蘭市北辰中学校	3年
・生きるために必要なこと	小 玉 紗莉菜	室蘭市東中学校	2年
・『明日につづくリズム』を読んで	大 谷 奈 央	森町森中学校	2年
・奇跡と共に生きたメッセージ『奇跡のプレイボール』を読んで	佐々木 琴 華	遺愛女子中学校	1年
・「ビーバー族のしるし」を読んで	池 原 早衣子	旭川市北星中学校	2年
・「タイガとココア」を読んで	池 田 みのり	帯広市南町中学校	2年

高等学校の部 (5名)

作 品 名	氏 名	学 校 名	学年
・「みんなに笑顔を…」	楯 ゆみり	旭川東高等学校	1年
・私にできること	島 下 麻 里	旭川西高等学校	3年
・「日本語は亡びない」を読んで	大 崎 実 歩	北見北斗高等学校	2年
・ごく基本的な恋愛小説	服 部 恵 典	帯広柏葉高等学校	2年
・風と風車	平 山 鉄 也	旭川東高等学校	2年



2010年は「国民読書年」

国民読書年宣言

国民読書年に関する国会決議は、「文字・活字は、人類が生み出した文明の根源をなす崇高な資産であり、これを受け継ぎ、発展させて、心豊かな国民生活と活力あふれる社会の実現に資することは、われわれの重要な責務である。」と宣言しています。この決議に基づき、2010年国民読書年は、国民が読書を通じて、言葉の力や他者を思いやる心、瑞々しい感性や想像力を培うことを目標に掲げています。

人が、その生涯で最初に出会う文字・活字文化は、絵本です。赤ちゃんからお年寄りまで、人生のすべてのステージで読み継がれてゆくのも、また絵本なのです。選び抜かれた言葉と絵には、人々の心の扉を開き、生きてゆく上で大切なことを伝える力があり、それが読書の基盤ともなっています。

古今東西、日本をはじめ世界の国々では、いろいろな機会に、真心をこめて、贈り物をする習慣があって、心の通い合う結びつきのもととなっています。そこで私たちは、国民読書年を機に、学校や職場、家庭や地域で「絵本を贈り、贈られる生活文化を創造するために行動を起こす」ことを呼びかけます。

個人の意思に信頼を寄せたこの運動は、広く浸透するまでには、よほどの歳月が必要でありましょう。それでも、私たち一人ひとりのささやかな行動の積み重ねが、やがて、この国の「知的な未来」につながることを確信し、多くの国民が参加されることを訴え、「国民読書年宣言」といたします。

2010年10月23日

2010年国民読書年記念式典

優良賞

小学校（低学年）の部

北斗市市渡小	2年	千葉 朋香
室蘭市海陽小	1年	神島 悠斗
函館市港小	2年	佐々木莉子
函館市北美原小	2年	能正 舞
小樽市手宮西小	2年	根本 成瑠
室蘭市白鳥台小	2年	新藤 翔馬
旭川市北光小	2年	河本 凜乃
音更町西中音更小	2年	三田 黎
旭川市千代田小	2年	木脇 真由
北斗市久根別小	2年	古川ひなた
幕別町札内南小	2年	木村美優璃
旭川市北光小	1年	高野 佑介
小樽市色内小	1年	塩田 皐介
小樽市緑小	2年	杉之原 遥
函館市湯川小	2年	近藤 悠宇
室蘭市旭ヶ丘小	1年	棚橋 美奈
旭川市神楽小	2年	大越はつの
旭川市近文小	1年	北川 琴花
札幌市福住小	2年	鈴木俊太郎
小樽市若竹小	2年	渡邊 りか

小学校（中学年）の部

岩見沢市栗沢小	3年	柳谷 一輝
教育大附属旭川小	4年	高羽 素直
小樽市望洋台小	4年	水野まりん
函館市北美原小	3年	伊藤 陽菜
旭川市東五条小	4年	酒元 美月
函館市桔梗小	3年	橋場 千紘
岩見沢市栗沢小	3年	日笠 美空
苫小牧市大成小	4年	加藤 康太
旭川市啓明小	3年	成田健太郎
由仁町三川小	3年	岩崎 秀真
北斗市石別小	4年	松本 萌
教育大附属旭川小	4年	野村 京花

教育大附属函館小	3年	田中ひまり
室蘭市地球岬小	3年	西本永里菜
旭川市神楽小	3年	小野 瑞貴
北斗市谷川小	3年	池田 知尋
室蘭市桜が丘小	4年	浅野目 耀
室蘭市旭ヶ丘小	4年	森元 寧々
旭川市啓明小	3年	吉田亜柚華
北斗市市渡小	4年	藤谷 叡

小学校（高学年）の部

旭川市神居小	5年	野上 夏奈
旭川市永山小	6年	藤田 そら
室蘭市地球岬小	6年	後藤星衣来
函館市深堀小	5年	杉谷 優佳
室蘭市海陽小	5年	阿部 真己
岩見沢市岩見沢小	6年	岩間 由記
苫小牧市明野小	6年	永桶 夢子
釧路市湖畔小	5年	河原 寿賀
岩見沢市美園小	6年	江藤 春花
小樽市緑小	6年	加能 里菜
旭川市啓明小	5年	近藤 杏咲
長沼町北長沼小	6年	近藤 里香
函館市えさん小	6年	榎 竜一
室蘭市地球岬小	5年	竹野 留里
岩見沢市美園小	5年	男澤 果林
室蘭市絵鞆小	6年	森岡 晴香
函館市柏野小	5年	中桐悠一郎
森町駒ヶ岳小	6年	袴田 浩章
滝川市滝川第三小	5年	鈴木ありす
函館市北美原小	5年	柴田 優奏

中学校の部

旭川市西神楽中	2年	前原 加奈
北斗市上磯中	2年	佐藤真澄美
留萌市港南中	3年	船越 瑠菜
留萌市港南中	2年	高橋 遥奈

小樽市松ヶ枝中	1年	高村 知穂
函館市亀田中	3年	千葉 愛莉
札幌市発寒中	1年	小澤 俊文
滝川市明苑中	3年	松原 由季
苫小牧市明倫中	2年	蓼沼富貴子
苫小牧市和光中	1年	加藤 萌結
苫小牧市光洋中	3年	広田 大樹
美唄市峰延中	3年	鈴木 茜
月形町月形中	3年	鈴木 綾夏
藤女子中	1年	長尾あかり
小樽市松ヶ枝中	1年	田中日奈子
函館白百合学園中	2年	館山 朋見
札幌市啓明中	2年	齊藤 真由
遺愛女子中	2年	松下 海星
岩見沢市豊中	2年	明石 大樹
札幌市向陵中	1年	田邊 優一
登別明日中等教育	2年	磯田雄一朗
札幌市八軒中	2年	下道 梨央
旭川市光陽中	3年	早川 太陽
札幌市向陵中	1年	樋口 佳南

高等学校の部

留萌高	3年	高野 紗英
札幌聖心女子学院高	3年	伊藤 澤
岩見沢東高	2年	住永 鈴奈
岩見沢東高	3年	鈴木 生
士別翔雲高	2年	加藤 真衣
帯広大谷高	3年	山田 雛子
函館中部高	2年	額田 千裕
函館中部高	1年	奈良岡妙佳
函館白百合学園高	1年	山下優里菜
旭川藤女子高	2年	竹中 清乃
旭川藤女子高	1年	蓑島 福子
旭川東高	2年	堀川 夢

第32回全道高等学校図書研究大会（函館大会）報告

10月12日(火)13日(水)、函館工業高等学校および函館市民会館において、北海道高等学校文化連盟主催の第32回全道高等学校図書研究大会函館大会が行われました。全道から115校、図書局員・図書委員472名、顧問143名が集まり熱気あふれる二日間になりました。

第一日目は開会式の後、12分科会に分かれて、それぞれ研修しました。第1分科会は「図書館づくり」をテーマに日々の活動の意見交換。第3分科会の「魅せる図書館づくり」では展示コーナーの製作例や人目を引く本棚の演出法などを学びました。第10分科会「風になった石川啄木」では、函館市文学館を見学しつつ、自らの運命を北海道に託した啄木の生き方を学びました。分科会終了後、参加者全体が体育館に集まって約1時間の交流会。クイズ大会、サプライズの本の贈呈式、「友だちに読ませたい本」の上位作品発表などで盛り上がりました。

第二日目は記念講演として現代詩作家・批評家の荒川洋治氏を招いて「文学とジャンル」と題して講演をしていただきました。ジャンルが単なる分野・領域を区分けするためのものではないという氏の言葉には、深く鋭い感性が感じられるものがありました。来年の33回大会は苫小牧です。記念講演者など未定の部分もありますが、分科会内容などは着々と決定してきており、地元色豊かな大会が期待されます。

(文責 北海道札幌南高等学校 教諭 大塚明彦)



第52回北海道図書館大会の報告

■第4分科会

絵本の魅力～読み聞かせ

絵本屋ぼこべん 店主 飛鳥 詩子

1. 生きる力を内蔵している

絵本は子どもだけのものではなく、大人のものでもある。そして物語は人と人とを結ぶものである。私は今まで絵本の読み聞かせに関わる企画や運営等、黒子の役割に徹することで、そのことを実感してきた。赤ちゃんから老人まで、どんな年代の人にとっても、絵本を読み合うことは、目と体と心で喜びを感じることであり、生きる力の源なのである。



2. 選本のポイント

ア) 人間観

選本する者の人間観が反映されるので、聞き手がどんな人間に育ってほしいのか、あるいは自分自身がどんな人間になりたいのかを熟慮する必要がある。

私は選本の一つのポイントとして、社会と人間の関わりに着目している。その絵本の中に社会時間が入っているかどうかを重要だと考えている。特に9歳前後になると社会的時間や世界観が確立してくるので、その手助けになるものを選びたい。例えば『ぼくがラーメンたべるとき』(長谷川義史・教育画劇)は良書である。子どもの具体的な行動、しかも生きるための行動が描かれており、絵本の中で一貫した社会的時間の流れがある。そしてこの作品は、絵が語っているということも素晴らしい。

また、どんな人生観が描かれているかというのも見るべきである。『トンちゃんってそういうネコ』(MAYA MAXX・角川書店)は、障害を持ったトンちゃんのしなやかな生き方、感性の豊かさが描かれており、自分と違う人の生き方を自然に受け入れることができる作品である。同じく「障害」を扱った絵本『はせがわくんきらいや』(はせがわしゅうへい・温羅書房)は、かつて日本中の福祉が揺さぶられた作品である。障害者はかわいそうではないという考え方を、日本中に広めた一冊である。最初に出てくる「きらい」と最後に出てくる「きらい」の描き分けが素晴らしいので、その違いに注目して読んでほしい。

イ) 絵と言語の芸術性～物語

絵本とは生きる力になるものなので、絵と言語によって「真・善・美」が表されているものを選びたい。「真・善・美」とは哲学等で使われる言葉だが、私はこれを人間が目指すべき目標だと考えているので、大切にしている。

また私は、書き手が自分の描きたいことを最後の最後まで手放さないで書いているかどうか、重要なポイントだと考えているので、必ずそこを見て選んでいる。

ウ) 発達にみあっているか

特に親や教師など、子どもと日常的に関わりのある大人は、その子がどのような発達段階にあるかを把握しているので、それを考慮して選本すべきである。同じ年齢でも、本の好きな子どもと、本の世界になかなか入っていけない子どもがいるので、その子どもの様子をよく見て、一緒に読み合うということが大切である。

絵本を差し出すということは、気持ちを差し出すということである。それを踏まえて「絵本屋ぼこべん」は、絵本は決して特別なことではなく、自然に人と共にあるよう願っている。

(文責 北海道北広島西高等学校 教諭 晶師 広光)

■第8分科会

『語り』の魅力～その実際

～ストーリーテリングの世界～

札幌おはなしの会 代表 平野美和子

1 『語り』ってなに？

a 『語り』の起源・歴史

b 『語り』(ストーリーテリング)の役割

* 言葉を獲得し、人生を理解していく手がかりとなる想像力を育む。

* 語り手と聞き手の経験の分かち合いが人間関係を育む。

* 他人・他の文化への認識が拓がるとともに、自分を理解し始めることができる。

* 聞く力、話す力、想像力、語句を組み立てる力、お話を創造する力に磨きをかける。

* 読むことへの橋渡し

「『語り』は人と人の中にある人間らしい気持ちに溢れた生きた言葉で交わされる、心と心の伝達の活動である。」
(櫻井美紀さんの言葉)



c 『語り』の認知・市民権

・読むことと、語ること
・読み聞かせ・朗読・語りの混同・比較

d イメージを描く

・人間の感覚 五感(視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚) + α
・想像力の喚起→聞き手と語り手のコミュニケーション
→おはなしの共有

2 「おはなし会」の実際 ～プログラム作りと実践

ex. なまえ : “おたのしみ おはなし会”

いつ? : 秋・放課後

どこで? : 小学校の視聴覚室or図書館

だれに? : 初めて『語り』でおはなしを聞く
低学年(1～3年生)・自由参加

プログラム

1 紙	おはなし	…導入
2 S	スワファムの行商人	…イギリスの昔話 (日本・みそかい橋と同じ)
3 S	ねずみ浄土	…日本・隣の爺型のおはなし
4 S	は一その通り	…日本・聞き手に参加してもらう
5 詩	みんながうたう てんでんのうた	…詩の紹介視覚と頭の体操
6 S	ひなどりとネコ	…ミャンマーの昔話(おかしい)
7 S	三枚のお札	…日本・逃走譚(こわい)

時節、対象年齢、経験、会の状況、導入の工夫、内容のメリハリ、構成の配慮

(わらべうた手遊び等参加できるもの、視覚に訴える話などを加えるなど)

3 『語り』でおはなしを届ける～活動の現状

図書館 ・自分たちで企画するおはなし会

小学生対象・大人対象(年4回実施)

定期的におはなしを聞ける場を用意する

出前 ・依頼に応じて出前するおはなし会

目的、対象に応じて

身近な場でおはなしに出会う機会の提供

・保育所・幼稚園・小学校・中学校・大学・高齢者施設など

【課題】～『語り』の認知と理解

語りの場の提供、ボランティアの活用、新たな語り手の養成など

(文責 札幌おはなしの会 柝木 絵里子)

学校図書館情報



2010年は「国民読書年」

◆第43回北海道学校図書館研修講座へ参加を基本がわかる！ 具体的にわかる！

- ・日時 1月5日(水)～7日(金)
- ・会場 北海道立道民活動センター (かでの2・7) 他
- ・講演 「学習指導と学校図書館」
帝京大学文学部教育学科・大学院教職研究科
准教授 鎌田 和宏 氏
- ・講義・実習・討議・交流の充実した3日間
※詳しくは案内要項またはHPでご確認ください。

◆暮らしと図書館を考えるつどい 開催される

11月21日(日)、北海道青少年会館を会場にして「北海道の図書館のこれからを考える会」主催で、東京学芸大学教授 山口源治郎氏を迎え「生きづらい時代だからこそ図書館を生かそう」とのテーマで講演が行われた。図書館空間の「擬似市場化」が進む中で、「生存基盤としての図書館」、図書館に「公共空間」を創ることが提唱された。

◆「子どもと本の橋渡し 学校&公共図書館」

11月23日(火)札幌エルプラザを会場にして、平成22年度北海道公共図書館司書会第2回研修会が開催された。大久保会長がパネラーとして参加し、学校図書館と公共図書館の連携の在り方について意見を交流した。

◆感想文集『北海道の読書』(平成22年度版)の普及を

- 第56回青少年読書感想文全道コンクール入賞作品集
- 小学校版(1,000円)
特別・優秀・優良入賞者 全作品を掲載
 - 中学校・高等学校版(1,000円)
特別・優秀・優良(一部)入賞者作品を掲載

【申し込み・問い合わせ先】

札幌市立西岡南小学校 佐藤秀則
FAX 011-582-1590

事務局

〒062-0054 札幌市豊平区月寒東4条18丁目10-43
札幌市立しらかば台小学校内
事務局長 野村 邦重
TEL 011-852-4090
FAX 011-852-2379
e-mail kunishige nomura@city.sapporo.jp

ホームページアドレス

<http://www.hokkaido-sla.jp/>

Amenity B-Coat

本の破損や汚れを防ぎながら、抗菌効果を発揮するブックカバー「アメニティBコート」ポリプロピレンフィルムのため、燃焼時にも塩素ガスなど有害物質が発生せず、安心です。ご指定の上ご愛用ください。

キハラ株式会社

〒062-0035 札幌市豊平区西岡5条3丁目8-15
TEL (011) 857-3331
FAX (011) 857-5211

◆第38回中学生作文コンクール審査終了

作品応募、審査協力ありがとうございました。応募総数が昨年より304点増え、20,212点でした。生徒数の減少が続く中、応募率は13.92%(前年度13.79%)となりました。引き続き、参加応募校の増加を期待します。

◆第2次札幌市子どもの読書活動推進計画(2010~2014年)策定

札幌市では、平成17年度策定の第11次計画が平成21年度末で期間満了となり、引き続き第2次計画を策定しました。3つの基本目標【①読書の楽しさにふれる。②読書の大切さを知る。③子どもの読書をみんなで支える。】を掲げ、計画の数値目標を示しました。

区分	平成21年度	平成26年度 目標指標
学校における一斉読書の取組み	小学校 98.6% 中学校 79.6%	100%
幼児・児童1人当たりの年間児童書貸出冊数	10.7冊	13.0冊
図書館と連携した活動を行っている学校の割合(授業の一環としての訪問や貸出利用)	小学校 12.6% 中学校 34.7%	100%

※詳しくは札幌市中央図書館のHPでご確認ください。

編集後記

天候や季節の変化が例年とはかなり違っていた2010年が終わろうとしています。12月を迎えて皆様にはお忙しい毎日をお過ごしのことでしょう。本号は、第56回青少年読書感想文全道コンクールを特集しています。さらに、9月の第52回北海道図書館大会の様子、10月に函館で行われた第32回全道高等学校図書研究大会の報告も掲載しています。

読書週間の新聞記事に、中学校の国語の授業の始めに絵本の読み聞かせを取り入れて効果を挙げたという事例が紹介されていました。絵本に触れ聞く心地よさを知り、それが人の話を聞く姿勢につながっていく。授業中の集中力が増したそうです。また言葉を基にイメージ化する力がつき、読書への関心も高まったということです。手立てを工夫することで、本好きな子を増やした良い例だと思えます。

担当：杉本 操 村山 知成 佐藤 秀則
野村 邦重 飯島 道恵